



田んぼを見て考えた

デュポン株式会社
専務執行役員 農業製品事業部 事業部長
後藤 周司

ゴールデンウィークの直前に成田空港から自宅に戻る際、沿線の水田には水が張られて代掻きの準備が始まっていた。その直後に帰省した九州では、まだ麦が緑から黄金色に変わる最中であった。5月から6月は田植え前線が北から南へ下って行く。私は、1989年から数年の間、除草剤の開発担当を仰せつかり、ペンシルフロロンメチル（DPX-84）を抱えて、色々な組み合わせの混合剤開発や、省力化や環境保護の観点から従来の3キロ粒剤に変わる新たな処理技術を目指して1キロ粒剤やフロアブル剤そしてジャンボ剤の開発を積極的に推進していた。結果的に数多くの剤を日本各地の試験場で試験していただくことになり、まず沖縄や南九州の早期地帯を皮切りに出張が始まり、薬剤の処理後日数あるいはヒエの葉齢や稲の生育に合わせて、北から南へ日本全県を巡り、何往復も試験圃場を観察する旅を重ねたことを思い出す。夏になる前に既に真っ黒に日焼けして、泥の付いた服に、長靴が入った大鞆を抱えて、時間と勝負の大忙しの全国行脚ではあったが、日本全県を訪ねることが出来、お蔭様で日本各地の山の幸に海の幸、加えて美味しい地酒も数多く味わうことが出来た。おまけに、韓国でも同様に開発活動の支援をし、お肉やお魚、焼酎三昧だったことを思い出す。勿論、仕事はちゃんとしたつもり。無事に最初の1キロ剤、フロアブル剤、ジャンボ剤の試験を終了し、登録申請を済ませた後、1993年に米国に転勤となったが、これらは無事に1993年から1995年にかけて登録となり商品化された。

水稲除草剤は異なる有効成分の組合せで製品が成立する分野であり、異なる成分の出会いと組合せが新しい製品を創出させる。ペンシルフロロンメチルも、様々なヒエ剤、薬

害軽減効果や特定雑草に卓効の剤との組合せの妙で、永らく日本の水稲作りに貢献して来たと自負している。それゆえにか、地域によって抵抗性雑草が発現したが、宮城県と日本植物調節剤研究協会と弊社の共同で開発されたITOキットを使用して抵抗性の確認が出来れば、これらの雑草に効果のある成分を含有する混合剤を普及し、今も効果や安全性の観点から総合的に安心して使用できる製品であり続けているといえる。

釈迦に説法ながら、農業とは、病虫害や雑草への十分な効果を確保しながら、農作物に対する安全性と、作業員や消費者に対する安全性と環境への安全性が証明された証として登録が認可された商品である。減農薬に反対はしないが、農薬を使わないから安全という宣伝には違和感を持たずにはられない。その意味から、除草剤の有効成分が少なくなることがあっても安全であるかのような主張にも不合理を感じる。日本は自然に恵まれているがゆえに、病虫害や雑草の発生も比較的に多く、農業の必要性が高い。安全の証として農業登録が認可されたのに、減農薬に価値があるというアンチテーゼは、日本は農業に適さないと断言しているようにさえ聞こえる。農業開発には、長い年月と多額の費用を要する。長期にわたる研究開発と、普及適用性の確認を経て、ようやく防除剤に採用された後に、減農薬等の理由だけで、3から4年で使い捨てされるようでは、将来、農業に投資しようという企業は無くなってしまわないかと危惧してしまう。どうか、日本の気候や風土において農業を持続可能にするためにも、除草剤をはじめとする優れた農薬を、大切に長く使用するようにしていただきたいと切望する。